

はじめに

アントニオ・グラムシは1891年1月、イタリアのサルデーニア島に生まれた。リソルジメント(国家統一)運動による統一国家の成立から30年目の年であった。今年が生誕130周年であり、近年グラムシが遺した『獄中ノート』をはじめ全著作や手紙を収録したナショナル・エディション(国家版)が国家的事業として刊行開始され、またその一環として『獄中ノート』完全復刻版(G・フランチョーニ編、全18巻、2009)が先行出版され大きな関心が寄せられている。

グラムシは1937年4月、ファシズムの獄からの釈放直後に急逝したので、『獄中ノート』の全草稿公開には72年間という長期の年月を要した。『獄中ノート』グラムシ研究所校訂版(V・ジェルラターナ編、全4巻、1975)には主要な「ノート」が収録され、重要な意義を有したが、『ノート』復刻版の編者フランチョーニが指摘するように重要な欠陥(編集上の改変や「マルクス翻訳」パートの除外など)を含むものであることが復刻版の刊行によって明らかとなった。

『ノート』復刻版の公刊になぜ72年という長期間を要したのか？そこには現代史の「闇」の部分も含む複雑な要因が介在している(その最も重要な要因の一つにソ連邦の解体、ソ連共産党の消滅がある)。この72年間にはスターリン問題(彼は1953年に没したがその否定的影響力は後年まで続いた)、トリアッティが果たした複雑な役割、イタリア共産党とソ連共産党との確執やグラムシの妻ジュリアや二人の姉タチアナ、エウゲニアのシュフト家三姉妹によるグラムシの遺稿、遺品の保全、出版準備などのための献身的な取り組みなども「72年」には含まれており、近年グラムシの遺族や研究者による「72年間」の「闇」や「謎」の解明も含む研究が進められている。また研究史として重要な事項であるが、グラムシを「異端」として敵視する見解がその根拠の「理論的誤謬」が明白になった現在でも撤回されることなく、長期にわたって流布されていることも「闇」の深さを示していると考えられる。グラムシはこのような「異端審問」型思考を批判する重要な草稿を残している(第2章を参照されたい)。

この小著ではグラムシ思想の現代的意義の探究という視点から、グラムシの市民社会論に焦点を当てた。グラムシは『獄中ノート』において30編以上の市民社会論に関する草稿を遺している。『獄中ノート』(全29冊—翻訳ノートは除く)は「第10ノート」以降主題が明記された「特別ノート」およびその補足的「ノート」が執筆されるが、「市民社会論」についてはグラムシが重視したテーマであるにもかかわらず、単独の「市民社会論ノート」は執筆されなかった。またグラムシが重視した「ヘゲモニー論」についても同様で、単独の「ヘゲモニー論ノート」は執筆されなかった。「第10ノート(クローチェ論)」、「第11ノート(ブハーリン論)」、「第12ノート(知識人論)」、「第13ノート(マキアヴェッリ論)」などにはグラムシの市民社会論に関する重要な草稿が収録されている。それらの草稿は「第7ノート」冒頭における「マルクスへの回帰」(フランチョーニ)を示す「マルクス文献(ドイツ語版)の翻訳・研究」、同時期のスターリニズムの弊害を示す「社会ファシズム論」(1929年)に対するグラムシの批判およびスターリン派の政治囚からの迫害、スターリンによる「異端審問」的な異論の抑圧・迫害の跋扈(それは言論テロル・粛清としての「モスクワ裁判」に至る)などの深刻な事態の進行を背景に執筆されている。

一例をあげれば、グラムシは「第3ノート」に興味深い草稿を記している。「古いものは死につつあり、新しいものはまだ確かではない。その間の空白期には多くの病的な兆候が表れる」(草稿34 B)。この草稿が執筆されたのは1930年末であり、グラムシがスターリン批判の見解の公表によって迫害を受けた直後のことである。「新しいものの生成」と期待されたロシア革命後の事態はスターリニズムの進行によって、批判派や異論派の追放、粛清などの「病的な兆候」つまり「新しいもの」

とは正反対の兆候が顕著になりつつあった。また市民社会論に関する多面的な考察を示す草稿が継続的に執筆されるのも同時期である(第1章、第2章を参照されたい)。

『ノート』復刻版によって明らかにされた「マルクスへの回帰」とスターリニズム批判(俗流唯物論批判)草稿の接点に市民社会論関連草稿が位置することが明らかになったことによって、グラムシがこのテーマに込めた意味が明瞭になったと考える。『ノート』復刻版は、各「ノート」のみならず各重要草稿の執筆時期・執筆過程や「外部」情報との関連(グラムシは数種類の新聞、定期刊行物を購読していた)にも言及しており、一見断片的にみえる個別草稿に込めたグラムシの含意(メッセージ)や各草稿間の関連について有益な教示を受けたことを記しておきたい。また『ノート』の全ページには監獄の担当者の検閲印が押されており、日々の検閲の厳しさを示している。またイタリアの優れた歴史家A・レプレは著書のなかでグラムシが『ノート』執筆において「暗号化」やカモフラージュなど細心の注意を払っていたことをリアルに描いているが、グラムシの各草稿の「難解さ」や「謎めいた表現」にはこの「検閲との闘い」も無視できない要因といえる(レプレ、2000)。

この小著はグラムシの「未完の市民社会論」の実像を明らかにし、遺された課題を明らかにし、さらに現代的市民社会論の系譜にグラムシを位置づけたいという企図の下に論述した。読者諸氏の忌憚ない御意見、御批判をお願いしたい。

2021年10月29日 著者